

着物は無理でも

石井 泰子

ぽとっと小さなものが落ちる音で眠りかけていた私は目を覚まし、裸電球のソケットから枕元に垂れ下がっている麻の紐を引っ張ってカチッと電灯をつけた。

黄色っぽい光に照らされた弁慶格子の掛布団の上で丸まっていた白っぽいものが、パキッと反動を付けてほんの少し飛び上がった後、向きを変えて再び布団の上に落ちてそのままグニョグニョと動き出した。

ギャーという私の叫び声に驚いた大人達が、お茶を飲んでいたいろり端から次々に部屋に飛び込んで来た。息もできないほどに強張っている私を母が素早く抱き上げた。

その物体をチラッと見たこの家の主は「あんれまあ！　なんでこんな所に落っこったんだっぺ？　寝床に居なきゃ駄目だっぺよ」と言いながら屈みこんで両手でそれをいとおしそうに取り上げて掌の上でくるりと転がした。

その薄気味悪いものは母の両親、つまり私の母方の祖父母が曲家の屋根裏部屋で『おかいこさま、おかいこさま』と呼んで大切に育てている蚕だった。

どうした弾みか、おかいこさまは桑の葉が敷き詰められた飼育箱から這い出して、田舎育ちのくせに鳥肌が立つほどに虫嫌いの私の布団の上に落ちたのである。その夜はおかいこさまが体中を這いずり回る妄想に駆られ、母の懐にしがみついて眠った。

それ以来、私は二度と外祖父母の家には泊まらなくなった。昭和二七年、七歳の初夏の出来事である。

母は紬産業で栄えている結城市と小さな川を隔てて隣接している桑絹村という片田舎の出身である。父と結婚する時の嫁入り道具に結城紬を織る機はたを持ってくるほどの機織りの名手で、私が物心付く頃には常に機に乗っていて、キーッ、チャンチャン！　キーッ、チャンチャンと賑やかな音を立てていた。

結城紬は縦糸に薄く溶いた糊を両手で引いて張りを持たせながら織るため、母の手はいつもガサガサに荒れてあかぎれができていた。気休めのように、ももの花ハンドクリームを摺り込んでいたが、セーターはささくれに引っかかって毛糸が纏れたし、髪を縛ってもらう時も首筋がチクチクした。

朝から晩まで機の上に突っ伏して糸の調子を見ては織る、調子を見ては織るの繰り返しで子育てなどは上の空のように見えたし、四人姉妹の面倒は祖母の役目だった。

それはそれで良いのだが、たまには母の膝で甘えたい時もあり「大人になっても絶対に機織りなんかにはならないで、優しいお母さんになるんだ」と心に誓ったものである。

しかし、結婚した女には大した仕事もなかった時代に、母の織る結城紬が暮らしを大きく潤したことは間違いなかった。

それと、機織り仲間が織っている紬の横糸と縦糸の調子がずれて精緻な柄が合わなくなり、にっちもさっちもいかなかったものを母が出張って糸の微調整をし、何とか売り物になるようにしてやって感謝された時などは、母の技術を誇らしく思ったものだ。

結城紬の材料になる生糸は、真綿から引き出した糸に唾を付けた親指と人さし指で撚りをかけたものを使うのだが、この仕事を糸取りと言い、近在の主婦の恰好の内職であった。

日がな一日、唾液を使って糸を撚っているのだから、口の中がカラカラになりそうなものだが、そんな話は一度も聞いたことが無い。

ただ、本当か嘘か定かではないが、同じ生糸でも若い女の唾で撚りをかけた糸には腰と艶があって値段も高いと言われていて、専ら縦糸に使うらしいという噂がある。

この話になると高齢の糸取り仲間から猛烈な反発と悪たれ口が爆発する。

「ふん、年を取るってのは哀しいもんだねえ。唾にまで艶が無くなっちゃうなんて馬鹿な話がなかつぱよ！ 誰のおかげで紬ができると思ってんだかよ。全く失礼な話だつぱよ」

その場では大仰に憤慨しながらもすぐにケロッと忘れて、プリプリ、プリプリと軽快な音を立てる糸取りに戻るのである。

ある日、たまたま私と二人だけになった時、母は苦笑いしながらこんなことを言った。

「私は結城紬を織るように生れ付いているんだね。だって、実家が桑絹村だよ。桑と絹。結城紬の代名詞みたいだつぱ。おまけにお姑さんが近所で評判の糸取りの名人だつぱ。どんどんどんどん下拵えをしてくれるんだもん、機織りとは縁が切れないよ。機織りは根気のいる仕事で放り出したい時があるよ。でもね、紬が織れるだけでお姑さんの前でも堂々と胸張ってられるからね。何でも習っておくもんだね。娘が四人も居るんだから一人くらい仕込んでやろうかね。泰子、やる気あっかい？」

今ならいざ知らず、中学生だった私はにべもなく断ったが、辛さを知っていた母が本気で教えようとしていたかどうかは分からない。

機織りに全く興味の無かった子供時代ではあったが、思い出すたびに心がほっこりすることが一つだけある。

それは織るだけでも四、五か月はかかる紬が仕上がるたびに総出でやった儀式である。

まず、子供達が母の仕事場に続く畳の部屋をきつく絞った雑巾で拭き上げる。その畳に丹精込めた紬を広げるため、染み一つ付けても折角の苦労が台無しになるからである。

畳がからりと乾いたところを見計らって、母がきっちり木の手棒に巻き取られている紬をシャッシャッと小気味いい音を立てながら巻きをほどいていく。ほどき終わると、祖母が使い込んで色になっている竹製の物指しを持ち出しおもむろに反物の長さを測り始める。

極り文句をまるで呪文のように繰り返してからである。

「七度^{ななたび}たずねて鋏を入れよ。七度たずねて鋏を入れよ」

祖母が四回、交代して母が三回、規定の尺があることを確認してやっと鋏を入れて反物を機から下ろすのである。

子供達は祖母と母の手元を見詰めながら、

「一つ、二つ、三つ……」と声を合わせながら見守る。

最後に「良し！」と祖母が気合を入れながら裁ち鋏を使う。じょりじょりという鋏の音を聞く母の顔がパーッと緩んで、その直後にカクッと肩の力を抜くのが常であった。

その後が子供達の出番である。座敷の隅から隅までを使って反物をピンと張り、織る時に柄を調整するためつまんだ遊び糸を小鋏で切り取るのだが、紬の端と端を持っているのが子供の仕事だ。それでいっぱし手伝った気分になるのである。

その頃は、織り手本人が縞屋と呼ばれる問屋に直接持ち込んで、何の彼のと交渉しながら紬を買い取ってもらう時代であったから、売りに行ったその日に現金が入った。

懐具合の良くなった母は土産の駄菓子を山と買って帰るのであるが、縁側に姉妹が揃って腰かけて待っているその時だけは、機織りも悪くはないなとこっそり思うのだった。

祖母が唾を付けながら一心に紡いだ生糸を使って母が織り上げた数知れない結城紬は生活の足しとなって、誰とも知れない人の手に渡って行った。おそらくは母自身が結城紬を身に付けたこともないまま、織り納めの一反だけが私の手元に残された。一反しかない物を一人で猫ばばすることもできず、ずーっと和箆筒の中で眠っていた。

母は九六歳で天寿を全うした。納骨後、私は姉妹を自宅に招いてこの結城紬を披露した。他の三人は反物の存在すら知らなかったから、最初は「どうしてあなただけ持ってるのよっ！」と気色ばんだが、私が独り占めしようとしていないことが分かると、一気に機織りの思い出話に風向きが変わった。

その話の中で、一番盛り上がったのが、紬を機から下ろす時の祖母の呪文であった。

「七度たずねて鋏を入れよ。七度たずねて鋏を入れよ」

この時ばかりは離れて暮らしている四姉妹の声がハモって、故郷のイントネーションが戻って来たのには大笑いした。

さて、一反しかない結城紬をどうしようかという段になったら、最初の気色ばんだ雰囲気はどこへやら、誰も着物として着たいと名乗り出る者が居ないのである。やれ足腰が痛くて着物どころではないとか、着た後の始末が大変だとか、合う帯が無いとか、言いたい放題である。

かといって誰か一人に渡してしまうのも嫌だなという気持ちが見え見えなのだからややこしい。

そこで、恨みっこなしで四等分してテーブルランナーとして使うことにした。

こうすれば母と祖母の思いの詰まった一品を四姉妹で共有できると思ったのだが、いざ鋏を入れるとなると手が震えた。

鋏を動かしつつ、機織りの名手だった母の娘でありながら結城紬を身に付けることは永遠に無いなという思いがチラッと頭を掠めた。

母を送ってから十五年が過ぎた。

ある日、結婚の祝儀のお返しにもらったカタログギフトを見ていたら、絹張り眼鏡ケースが目にとまった。錆朱の色に惹かれてそれをチョイスし、注文のハガキを出した。

送られてきた眼鏡ケースの化粧箱に印刷されている製造元を見て驚いた。そこは母が結城紬を売りに行った縞屋だったのである。

あの老舗がこんな商品を出すんだなあと思いながら、眼鏡ケースを開け閉めしていると連鎖反応で妙案が浮かび、思わず叫んだ。

「そうだ！ 私は洋裁ができるから姉妹で分けた結城紬を少しずつ出し合って、四人姉妹お揃いのバッグを作ろう！ 着物は無理でもバッグならみんなが身に付けられるし……。これでやっと機織りの娘らしくなれるわ」

「ほらねっ。何でも習っておくもんだっぺ」という母の含み声を聞いたような気がした。

(東京都大田区)

【無断転載を禁ず】